埼玉大学紀要　教育学部、67(1)：101－114（2018）

『知的障害特別支援学校における主体性を育む生活単元学習の取り組み』

―中学部１年生の働く学習（カフェ活動）の実践から―

加　藤　智　子　　埼玉大学教育学部附属特別支援学校
尾　﨑　啓　子　　埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター

キーワード：生活単元学習、主体的に取り組む力、勤労観、人とのかかわり、カフェ

１．はじめに

2017年３月に公示された特別支援学校の学習指導要領（文部科学省、2017）では、キャリア教育の充実が重要視されているが、知的障害特別支援学校におけるキャリア教育（職業教育）に関する実践研究は、高等部での実践報告に比べて中学部段階でのものが少ないという指摘がある（名古屋他、2008）。名古屋らは、職業教育が義務教育最終段階の中学部においても重要であるとの認識の下に、岩手大学教育学部附属特別支援学校中学部における作業学習及び働く活動をテーマとした生活単元学習の数年間にわたる授業研究と、他の特別支援学校における作業学習の視察ならびに資料収集・分析を通して、知的障害特別支援学校における職業教育のあり方を検討してきた（名古屋他、2008；2009；2010；2011；2012；2013；2014a；2014b）。また一連の附属研究において、中学部においても地域社会に根ざした働く活動は、生徒主体の学習の実現、青年らしい働く姿の実現とそのための能力の育成、地域との協働、持続可能な環境教育、いわゆる障害が重いと言われる生徒など多様な障害の生徒が取り組める活動の検討などの観点から成果をあげていることを示した（名古屋他、2014ｂ）。

本稿は、埼玉大学教育学部附属特別支援学校（以下、本校）中学部１年生が、平成28年度に生活単元学習で取り組んだ活動を素材として、実践報告をまとめたものである。「お店をひらこう」という大きな年間テーマを掲げ、お店で提供する商品の材料となる農作物の栽培や、お店で使うお盆とコースターの製作、お菓子作り、接客のためのおもてなしの学習など、小単元で計画的に学びを深め、つなげていった。

本稿の目的は、生徒個々の個性と能力に合わせて、中学部３年間で生徒につけたい力を設定し、段階的に働く学習に取り組む本校の教育実践を報告することにより、特別支援学校中学部におけるキャリア教育研究の充実に資することである。

1-1　本校中学部の生活単元学習

本校は、埼玉大学教育学部の附属学校として開校45年目を迎える特別支援学校である。さいたま市の北西に位置し、住宅街の中にあるが、芝生の校庭やグラウンド、学校のシンボルであるしいの木の林など緑あふれる学校である。小学部・中学部・高等部に知的障害を主な障害とする児童生徒60名が在籍しており、中学部は１学年１学級６名の定員となっている。

中学部では、卒業後の自立した生活をめざし、学校生活の中でより実際の生活に沿った学習に取り組んでいる。毎朝登校後着替え等の支度を終えると、生徒たちは「家事活動」として個々に

設定された家事活動に取り組んでいる。帰りの支度が終わった後も同様である。この取り組みは、毎日積み重ねて取り組むことで、家庭生活でできることを増やすことをめざしている。生活単元学習は、生活に即した一連の学習を設定することができ、個々の実態や課題に合った活動に取り組むことができるため、中学部では学校生活の中心となる学習となっている。

中学部の日課は図１の通りで、生活単元学習は火曜日から木曜日の３時限目に帯状に設定されている。週の中心、そして一日の中で一番活動しやすい時間帯に帯状に設定することで、学校生活の中心が生活単元学習での取り組みとなり、１日の流れにより見通しをもって望めるという利点がある。その他、がんばりタイム（個別の学習の時間）に生活で習得したい内容を個別に重点的に指導したり、２時限目と３時限目の２コマを生活単元学習として続けて取り長い時間設定したりするなど、弾力的な時間の使い方が可能となっている。

平成 28 年度　　中学部日課表

<table>
<tr><th>時限</th><th>時 刻</th><th>月</th><th>火</th><th>水</th><th>木</th><th>金</th></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td rowspan="2">8:50</td><td colspan="5">登　　校</td></tr>
<tr><td colspan="5">身 辺 処 理　家 事　朝 の 会</td></tr>
<tr><td></td><td>9:20</td><td colspan="5">移動・準備</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1</td><td>9:30</td><td>そうじ</td><td colspan="4" rowspan="2">朝　　会</td></tr>
<tr><td>9:45</td><td>全校朝会</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>マラソン
5-15-5</td><td>サーキット</td><td>マラソン</td><td>サーキット</td></tr>
<tr><td></td><td>10:15</td><td colspan="5">身辺処理・移動・準備</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2</td><td>10:20</td><td rowspan="2">45
作　業
45</td><td>がんばり
タイム
45</td><td>がんばり
タイム
45</td><td>がんばり
タイム
45</td><td rowspan="2">45
作　業
45</td></tr>
<tr><td>11:05</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>3</td><td>11:15</td><td></td><td>生活単元学習
45</td><td>生活単元学習
45</td><td>生活単元学習
45</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>12:00</td><td colspan="5">給　　食
配膳15分　食事30分</td></tr>
<tr><td></td><td>12:45</td><td colspan="5">身 辺 処 理 ・ 家 事 ・ 休 み 時 間</td></tr>
<tr><td></td><td>13:15</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">4</td><td rowspan="2">13:50</td><td>委員会
35</td><td rowspan="2">体 育
50</td><td rowspan="2">中学部
タイム
50</td><td rowspan="2">音 楽
50</td><td>がんばりタイム
35</td></tr>
<tr><td>14:05</td><td>身辺処理
家事
帰りの会</td><td>身辺処理
家事
帰りの会</td></tr>
<tr><td></td><td>14:15</td><td colspan="3">身辺処理・移動</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>14:20　下校</td><td colspan="3" rowspan="3">そうじ（30分以内）

身辺処理 ・ 家事・休み時間
帰りの会</td><td>14:20　下校</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>15:15</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>15:20　下校</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

図１　日課表

1-2　３年間の段階的な学び

本校中学部では、生徒が将来生き生きと職場で働いたり家庭で自立した生活を送ったりする姿をめざし、３年間で段階的に働く学習に取り組んでいる。１年次には、他者に物を提供して感謝や称賛の言葉を受けることで達成感や自己有用感をもち、働くことの楽しさを知る活動を行う。２年次には校外実習を経験し、実際の職場で「仕事」を体験することで「働く」ことについてのイメージをもつ。３年次には校内実習を２週間行い、長い時間働く経験をする。また、働く学習において

中学部段階では、個々の働く力を育てることがねらいの１つであるが、それ以上に、友達と協力して活動することの喜びやよさを感じたり、できることの経験の幅を広げていったり、他者とかかわる力を伸ばしていったりすることを重要なねらいにしていると言える。

本校中学部の体験学習の取り組みについては、別稿で紹介しており（加藤ほか、2016；加藤・尾﨑、2017)、考察では、見通しをもった活動体験が生徒の主体的な姿勢を導くこと、ひとりひとりの能力を高めるための状況づくりと協働活動ができる関係づくりが重要であることを述べた。

1-3　年間を通したテーマ設定

本校中学部の生活単元学習の大きな特徴として、それぞれの学級が年間を通して大きなテーマを設定して取り組んでいることが挙げられる。年間を通したテーマを設定することにより、生徒たちは何を学習しているのかが分かり、見通しをもって学校生活を送ることができる。そして、小単元ではより生活に即した内容を設定して取り組んでいく。平成28年度の１年生学級（以下、対象学級）では、年間を通して「お店をひらこう」という大きなテーマを掲げ、そのための準備として、小単元で農作物の栽培やものづくり、調理活動に取り組み、最終的にお店を開いてお客様におもてなしをする流れを計画した。生徒にとっては、今行っている農作業やものづくりの活動が何のために行っているものなのかという活動の意味が明確になり、より見通しをもって活動に取り組めると考える。そして何よりも、１年間が終わった時に、「自分たちは○○を頑張った」「○○を勉強した」と自慢して言えるようになることを願った。

2　対象学級の取り組み

2-1　生徒の実態

対象学級は中学部１年生で、生徒６名（男子４名、女子２名）が在籍している。主な障害の知的障害の他、自閉的傾向がある生徒が３名、ダウン症候群が２名、不安障害をもつ生徒が１名である。入学当初学級で行った自己紹介では、全員が自分の名前や好きな食べ物をイラストから選択するなどして口頭で発表することができた。自分から積極的に教員に話しかけ日常会話がスムーズにできる生徒や、伝えたい思いはあるが口腔の動きから言葉が不明瞭で話したいことをうまく伝えられない生徒、質問には提示した選択肢から選んで答えるが自分からはコミュニケーションを取ろうとはしない生徒等実態は様々である。そして、教員とはかかわりがもてるが、生徒同士でのかかわりは薄い集団といえる。また、取り組むべき活動に対しては、理解ができれば基本的には決められた活動に真面目に取り組む姿が見られるが、活動に飽きたり、疲れるような活動であったりすると、手を止めたり、教員に何も告げずに活動場所から離れてしまったりする姿もあった。１年生ということもあり、学校生活の全てが初めての経験で、何事に対しても多少の不安を抱いている部分はあるが、活動の意味や大きな活動の流れ、細かい手順等を視覚的に提示することで理解をして取り組むことができることが多かった。

2-2　生徒につけたい力

(1) 他者とかかわる力

中学部１年生として、まずは学級集団づくりのためにも、友達とかかわりをもちながら一緒に活動することの良さを感じることができる題材を設定していきたいと考えた。前述のとおり、生徒に

は様々なコミュニケーションの課題がある。自分の主張を友達に強く押しつけてしまう、教員の支援がなければ自分からかかわることが難しいなど、生徒同士が自らかかわりのある集団を作ることは難しく支援が必要な状況であった。しかし、障害の特性等で自らかかわることが苦手な生徒であっても、他者と適切にかかわる力や、困った時に伝える力は、将来の社会生活を豊かにするためにも身につけておきたい能力である。学習場面において、これらの「かかわる力」を育む場面を計画的に設定し、少しずつ身につけられるよう授業を設計した。

(2) 主体的に取り組む力

将来、家庭や職場など多くの場面で生き生きと生活できるようになるために、何事に対しても「自分から」取り組む姿勢を育てておきたい。自分から取り組む姿を導くには、活動に魅力があり「やってみたい」と生徒が思えること、そして「できそう」と思えることが必要である。そのためには、たくさんの経験をして興味関心の幅を広げたり、成功体験をしてできると思えることを増やしたりしていくことが大切である。活動に取り組むには見通しがもてることが重要であるが、年間を通して同じテーマで活動することで自分が今何のためにこの活動を行うのかが分かり、大きな見通しをもって取り組める可能性が高まる。それは、活動への動機づけとなるものである。

(3) 勤労感

働く学習の第一段階として、自分が行ったことに対して他者から感謝や称賛の言葉を受けることで、働くことのよさを感じられるようにしたい。その活動として、お茶やお菓子を振る舞うというものは、生徒にとって身近で好きな飲食物を扱うということになり、より分かりやすく取り組みやすい題材であると考え、選択した。

2-3　指導の方針

(1) 他者とかかわる力を育てる

障害の特性から自分から他者にかかわることが苦手な生徒や、中学生という成長段階から恥ずかしさが現れて場面により口数が少なくなってしまう生徒も多い。そこで、活動の中に教員や友達とかかわることを手順のひとつとして設定したり、他者とかかわる際に定型の台詞を設定したりすることで、自分からかかわる機会を増やすようにする。

また、友達との協働作業を設定することで、お互いを認め合い、友達のよさを知ったり、一緒にやることのよさを感じたりできるようにする。そして、全員で協力してお店を成功させるという意識やみんなで頑張ったからできたという感覚をもてるよう、活動のはじめや終わりに教員による働きかけを意図的に行っていく。

お店を開くことは、お客様である他者と関わることも大きな活動となる。お客様から「美味しかった」「ありがとう」等の感謝や称賛の言葉を受けることで、達成感や自己肯定感をもてるように心がけた。

(2) 主体的に取り組む力を育てる

生徒が主体的に活動をするためには、活動に見通しがもて何をやるのかが分かることが大切である。年間を通したテーマを設定することで、活動の大きな流れや何に取り組むのかを理解しやすくなると考える。また、活動の動機づけとして、活動や役割を「やってみたい」と思える魅力的なものにするために本物を見る経験をし、個々の実態に応じた役割設定や支援をすることで「できそう」と思えるようにしていく。

障害がある生徒にとって体験的な学びは大切である。見通しがもちづらかったり、過去の経験

をうまく活用できなかったり、物事を想像するのが苦手だったりする生徒も多いが、実際に体験しながら学ぶことで、生徒の中に経験として学んだものが少しずつ蓄積されていくと考える。自分の目で見て、手や足で触ってみて、匂いを感じて、音を聞いて、味わってみて、五感を働かせて身体全体で体験をすることで、より自分の中に体験のイメージが残るのではないか。中には、触覚や聴覚に過敏性をもつ生徒もいるため、個々に配慮をしながら進めていくことは必要となる。また、「とても美味しかった」からまた作りたい、「ぬるぬるした感じが気持ちよかった／苦手だった」からまたやりたい／やりたくない、「大きな音がした」けど次は大丈夫といった実感や、「とても緊張した」「困った」「嬉しかった」など心が動く体験も大切にしていく。これらの体験的な学びが次の活動の動機づけとなり、生徒の主体的な活動を導いていくと考える。

また、１年間の学習の流れの中に校外学習を計画的に設定していく。校外学習を行う目的は、学校の中ではできない本物の学びを体験することである。本取り組みでは、広大な田んぼでの田植えや稲刈りの体験、一面茶畑の土地での茶摘み体験、大工から木工を習う体験、実際にカフェへ行く体験、日本の伝統文化である茶道の世界の体験、そして校外でお店を開く体験等である。更に、生徒たちが校外で学んだことを、学校で再びやってみることでより深い学びへと繋がっていくと考え、年間の学習の流れを検討する際に、効果的なタイミングで校外学習を組み、深い学びができるように計画した。

(3) 勤労観を育てる

この１年間の取り組みの特徴的なところは、カフェに来店するお客様とかかわる学習場面である。そこに至るまでの長い期間、仲間と協力してお店を開くために準備を行い、お客様をおもてなしすることで初めてお客様である他者から評価を受ける。それが感謝や称賛の言葉であるので、その場面だけではなくそこまでの活動についても合わせて達成感や自己有用感をもつことができると考える。

また、製作や調理をする学習場面やカフェの運営の学習場面では、工程や手順を設定し、個々の能力や課題に応じた役割設定をしていく。役割設定では、できることを設定するのではなく、始めは少し難しいかもしれないけれど頑張ればできそうという課題を取り入れていく。それにより、活動ができるようになったときの生徒の達成感は大きくなり、その体験を重ねることでより自己効力感や自己有用感をもつことができる。それらは勤労観へと繋がっていくことと考える。

2-4　年間学習計画

年間で取り組むテーマ：「お店をひらこう」

月	小単元名	活動内容
４月	お米とお茶を育てよう	１年間の活動を知る 学級園の整備（田んぼ化） 校庭に茶の木を植える
５月		田植え【校外学習】及び学級園の田植え
６月	おいしいお茶をつくろう	茶摘み【校外学習】 手もみ茶作り
７月	カフェに行こう	カフェを知る【校外学習】日本茶の入れ方を教わる
９月	お店の道具を作ろう	お店の名前を決める お店の看板作り

		カフェで働く先輩を訪問する【校外学習】 お店の道具作り（お盆、コースター、皿、器） 稲刈り【校外学習】及び学級園の稲刈り
10月	おいしいおかしを作ろう	お店の道具作り（テーブル、椅子）【校外学習】 お土産作り お茶、お菓子の調理練習 お抹茶体験【校外学習】 接客練習
11月	ここカフェをがんばろう①	お店を開く　学内で５日間 大学祭に出店
12月		お世話になった方を招待する
１月	もっとおいしいお茶とおかしを作ろう	新商品の開発 飲み物とお菓子の調理練習
２月	ここカフェをがんばろう②	お店を開く　学内で５日間

3　指導の実際

3-1　茶の木の栽培、茶摘み、手もみ茶作り体験

埼玉県は国内の大規模な茶産地としては北限に位置しており、狭山茶の名が全国に知られている。その主産地である入間市には茶畑が広がる地域もあり、新茶の季節には一面黄緑色の茶畑と、刈り取られた茶の葉の香りが漂っている。今回は埼玉県茶業研究所に校外学習で訪れ、茶摘み体験と手もみ茶の作り方を教えていただいた。

どちらの活動も生徒にとっては初めての経験であったため、研究所の職員の方々からやり方を教えていただきながら取り組んだ。校外で学習をすることがまだ慣れていない生徒もいたようであったが、職員の方が丁寧に教えてくださり、次第に慣れて一緒に活動を進めることができた。

茶摘みの際「一芯二葉」で新芽を摘むことは、目と手の協応や手先の巧緻性などの学習に繋がるような動作であったため、難しい生徒も多く、新芽ではない濃い緑色の葉もたくさん摘んでいた。しかし、生徒の達成感を重視し技能面は問わなかった。自分で時間をかけて摘んだ籠一杯の茶葉を持つ生徒の嬉しそうな姿には達成感が表れていた。その後、室内で手もみ茶作りを教えていただき、出来たてのお茶を試飲して味を確かめたり、茶の葉を揉んで手の平が緑色になりお茶の香りが染み込んだのを自慢げに見せたりする姿が見られた。また、研究所から茶の苗木をいただき校庭に移植をすることで、普段から茶の木を目にして成長を感じることができるようになった。

図２　茶摘み体験

図３　手もみ茶作り

図４　手もみ茶の試飲

その後、学校でも手もみ茶作りに取り組んだ。葉を蒸すことと揉むことの繰り返しで根気のいる活動であったが、保護者や教員に試飲をしてもらい「美味しいね」と言ってもらうことが活動の達成感に繋がった。

また、自分たちで作ったお茶の名前を決める際には、生徒から「心を込めて作ったお茶」という言葉があがり、「ここ茶」と名付けた。

3-2　店で出すお菓子の原料となる米の栽培　田植え、稲刈り体験

さいたま市の農家の方々にご協力をいただき、田植えと稲刈りを体験した。当日は農家の方や役所の方等、10名程の指導者が参加した。活動中は、生徒一人ひとりを見守ってくださり、生徒はアドバイスを受けながら指導者と一緒に活動をした。

田植えでは、ぬるっとして足が泥に埋まってしまいそうな田んぼに素足で入り、思うように歩けない足元で田植えを行った。全員が初めての体験で、手が汚れないようにそっと苗を植えようとする生徒、汚れた感覚を感じるのが難しいため身体中に思い切り泥をつけている生徒、田んぼの中を楽しく走り回る生徒まで、様々な風景であったが、農家の方々は苗を整列させて植えることが難しい生徒たちにも嫌な顔一つせず、笑顔で対応してくださっていた。また、夏には鳥よけのために案山子を作って設置したり、苗をいただいて学級園でも栽培をして日々の成長を感じたりする活動も行った。稲刈りでは、育った苗を鎌で収穫したり、コンバインで収穫をする活動を見学したりした。学級園の稲刈りも行い、自分たちで脱穀や精米にも挑戦した。

図５　田植え体験

図６　稲刈り体験

図７　籾すりと脱穀

3-3　校外学習でカフェを訪れる

日本茶を提供しているカフェへ行き、自分で注文をして飲食をするという体験を行った。ここでは、お店に日本茶のメニューがあることを知り、入店から注文、飲食、会計というお店の流れを体験した。また、日本茶の専門店では、日本茶の美味しい入れ方を教えていただいた。普段お店に行くときは家族と一緒という生徒たちには、一人で注文して会計をするということ自体あまりな

図８　日本茶のカフェにて

図９　お茶の入れ方を習う

図10　個別に注文、会計

いことで、緊張している様子も見られたが、友達を真似したり、自分のタイミングで行ったりしながら、全員が一通りの流れを体験することができた。

3-4　お店で使う道具作り

自分たちで作り上げたお店という意識がもてるように、お店で使う物は可能な限り自分たちの手で製作した。

(1) 椅子の製作

校外学習で大工の方々に教えていただきながら、１人１脚の椅子を製作した。あらかじめ木材は加工しておいていただいたものを使うことで、生徒たちでも大工の方に手伝ってもらいながら、釘を打ったりヤスリをかけたりして、椅子を作り上げることができた。木材から椅子の形になるまで１人で全工程を行うことで、自分で作ったという感覚をもつことができた。

(2) テーブルの製作

保護者で木工が得意な方のご協力をいただき、カフェでお客様が使用するテーブルの作成に取り組んだ。椅子の製作同様、あらかじめ材料を加工しておいていただくことで、生徒たちができる活動でテーブルを作り上げることができた。大きなものであるからこそ作り上げたときの喜びを全員で感じることができた。

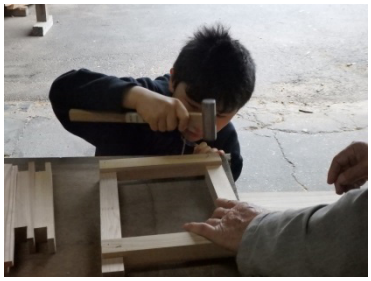
図11　椅子の製作（釘打ち）

図12　椅子の製作（やすりがけ）

図13　テーブルの製作

(3) お盆とコースターの製作

カフェで自分たちが使用するお盆とコースターを製作した。木材を鋸で切る、やすりをかける、オイルを塗る、組み立てるという工程を、生徒の課題に応じて役割設定をして取り組んだ。また、同じ活動であっても実態に合わせて方法を変えることで、活動しやすい状況を作り、達成感を感じられるようにした。例えば、木材を切る場面で、特別な機械を使うことが動機づけとなる生徒には鋸ではなく電動糸鋸やバンドソーを設定したり、やすりがけに見通しのもちづらい生徒にはタイマーを使用して決まった時間やすりをかけたりした。

図14　お盆の製作

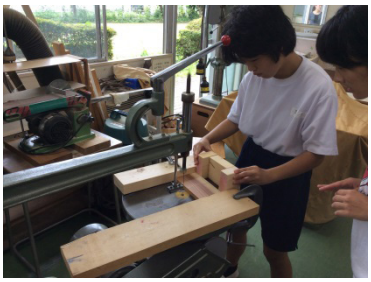
図15　電動糸鋸の操作

図16　やすりがけ

(4) 陶芸でお皿や箸置きの製作

カフェでお菓子を乗せるお皿や花瓶、箸置きを陶芸で製作した。高等部の作業学習で窯芸を担当している教員から直接指導を受けて行った。型抜きややすりがけ、撥水剤塗りや釉薬をかける活動など、こちらも数種類の工程を役割設定して取り組むことにより、自分の力を発揮して活動に参加できる状況を作った。

役割設定をして取り組んだ活動では、特に振り返りの時間を大切にした。動画で個々の頑張っている姿を全員に提示することで、自分が頑張っている姿を客観的に見つめて振り返ることができた。また、友達同士お互いのよさを認め合うことができ、「〇〇くん、すごい」という声も聞かれ、他者理解を促すことができたと考える。

図17　皿の製作

図18　型どり

図19　やすりがけ

(5) エプロンや三角巾の製作

個別の学習の時間を活用し、ミシンを使い裁縫の課題を設定した。担当したのはミシンの使い方が初めての生徒であったが、基本的な操作方法と約束を伝え、手本を示すことで、１人で全員分のエプロンと三角巾を縫い上げた。

3-5　お抹茶体験

お茶の栽培や茶摘み等、日本茶を扱う学習を行うこともあり、日本固有の伝統文化である茶道の世界にも触れる体験を計画した。正式な作法を扱うことは、生徒の実態から難しさがあるが、本物に触れられるよう、お茶室でお茶の先生にご指導いただきながら、お茶会を行った。日本庭園を抜け、狭いねじり口からお茶室に入り、静かなお茶室で背筋を伸ばして座り、目の前で立てていただいたお抹茶を口にするという初めての体験であったが、緊張しながらも自分なりに楽しみながら参加している姿が見られた。最後は、自分たちのカフェでもできるように、お抹茶の立て方を先生から教わった。

図20　ねじり口から茶室へ入室

図21　作法を教わりながら試飲

図22　抹茶を立てる体験

3-6　卒業生訪問

カフェで働く卒業生を訪ね、仕事をする姿を見学したり、仕事についての話を聞いたりする機会を設定した。生徒一人ひとりが事前に考えた質問をして、仕事で大切なことや、大変なこと、働く生活として帰宅後や休日の過ごし方等の話を聞くことができた。卒業生ということもあり、親しみを感じてより身近に働くことについて考える機会となった。

図23　卒業生の働く姿を見学

図24　卒業生から話を聞く

3-7　自分たちのお店「ここカフェ」を開く

(1) 接客練習

接客練習を行うにあたり、実態に応じて事前に朝の家事活動の時間や個別の学習の時間に課題を設定して取り組み始めた。具体的には、手順通りにお茶を淹れて教員に出して評価を受けることを毎日行い、より自信をもってできるようになったり、おしぼりを用意する活動を毎日繰り返すことで手順を覚えてできるようになったりした。役割設定は、個々の実態や課題から行い、接客で使用する台詞については、自分で考えて状況に応じた言葉で対応する生徒から、決められた台詞を繰り返し練習して覚えて伝えることが目標の生徒、台詞カードを見ながら正確に伝えることを目標とする生徒など、個々に応じて取り組み方を変えて行った。特に、自分から他者にかかわることが難しい生徒にとっては、台詞を手順の１つに設定し、決められた言葉を伝える事で、お客様から評価（称賛や感謝）が返ってくる状況を設定した。

(2) お菓子の調理

米をミルサーで挽いて米粉を作り、お菓子作りに使用した。大変であった田植えや稲刈りの活動がここで繋がり、お菓子の材料となることで、より親しみや自信をもってお菓子作りに取り組めるようにした。

お菓子作りは２人ずつのペア活動で行い、生徒同士がかかわり合い、助け合いながら進めていけるような設定を行った。具体的には、手順カードにペアのそれぞれの役割を明記することで、自分の活動に対する理解を進め責任感をもてるようにし、そして相手の動きに合わせながら自分の

図25　ペアでお菓子作り①

図26　ペアでお菓子作り②

図27　ペアでお菓子作り③

動きを調整することができるようにした。手順書には、ペアの相手に対する台詞も入れておき、誰でも決まった場面で自分からかかわることができるようにした。また、作り方の手順は、個々の実態に合わせたものを用意し、自分で確認しながら進められるようにした。

こめこのカップケーキの作り方

① 豆乳　100 g	① なべにみずをいれる
② あぶら　20 g	②先生にほうこく
	③ まっちゃ　1ぱい
③ こめこを 100 g はかる	④ さとう　2はい
④ まぜる	「〇〇くんおねがいします」
⑤ こめこを入れる	⑤ ベーキングパウダー　1ぱい
⑥ まぜる	
⑦ カップにいれる　トントン	
⑧ まめをのせる	
⑨ なべにいれる	
⑩ タイマー12分	⑩ あらいもの

図28　ペアでのお菓子作りの手順書

図29　実態に合わせた支援（視覚支援）

（3）実際のカフェの運営

11月に５日間、２月に５日間、校内でカフェを開いた。自分たちの父母や祖父母など身内の他、他学級や他学年の保護者の方々、これまでお世話になった農家の方やお茶の先生、そして校内の教員をお客様として迎えて行った。11月のオープン前には、何度も繰り返しお店の流れを練習して取り組んだにもかかわらず、オープン当初はスムーズに進めることは難しかったが、日を追う毎にスムーズに行うことができるようになっていった。そして、２月のカフェでは２回目ということもあり、より見通しをもって取り組むことができたため、教員の指示がなくても生徒たちで進める姿がより見られた。

接客場面では、台詞カードを見ながら決められた台詞をお客様に伝える生徒、お客様の反応や状況に応じて自分で台詞を考えて伝える生徒など、実態に応じた課題設定を行い取り組んだ。

図30　カフェでの接客①

図31　カフェでの接客②

図32　メニュー

4　活動成果と考察

4-1　他者とかかわる力

入学当初、友達や人とのかかわりは薄く障害特性からも自分からかかわることが苦手な生徒、活動に自分から取り組むことが難しい生徒もいた。そのため、活動中はペアでの役割設定を中心に行い、ペアの相手を誘ったり誘いを受け入れたりしながら、仲間同士で活動に取り組めるようにした。活動を正確に理解することが難しい場合でも、一緒にやっている生徒の姿を見ることで同じように取り組む姿が見られた。また、友達とかかわる設定を活動のひと手順として入れておくことで、自分からかかわることが少ない生徒でも自然にかかわりをもつことができた。これを通し、友達と一緒にやると何となく自分もできるようになることや、２人で行うことでより良い物が作れることを感じられたことと考える。これらの積み重ねから、日常生活の様々な場面でも友達に対して自然と誘い、また誘いを受け入れて一緒に行動する姿も少しずつ見られるようになってきた。

また、カフェでのお客様とのかかわりは、一緒に活動する友達とお客様として来店した大人との接し方の違いも経験することができた。それまでは、大人に対しても敬語がうまく使えない生徒もいたが、お客様と敬語で接することで体験的に敬語を使う場面や状況を学習することができた。今後、生活の中でこの経験が活かされていけることを願う。

4-2　主体的に取り組む力

実態の全く違う６名の生徒であるが、個々の実態や特性から、それぞれが「できる」ための環境を整えることで、自分の役割をやり遂げ「自分でできた」という思いをもつことができた。それは、お店を開く練習から実際のお店を開く取り組みにおいて、生徒たちは次第に教員の介入が減ってもスムーズに活動に取り組めるようになっていった姿からも言える。この要因は、繰り返し取り組むことで活動の大きな流れや細かい工程を理解することができたこと、お客様から感謝や称賛の言葉などよい評価を受けることで自信をもてるようになったこと、そして余裕ができたことで働くこと自体を楽しんでいるような姿が見られるようになったこと、など、様々な要因がよい方向に向かい相乗効果としてよりよい姿を導き出したのではないかと考える。特に、お客様からの「ありがとう」「美味しいです」「すごいね」という感謝や称賛の言葉により、生徒は達成感や成就感、自己有用感を抱き、「人に何かをしてあげることはいいこと」「働くことはなんだか楽しい」「もっと働きたい」という気持ちをもてたことと考える。毎回、カフェ閉店後の片付けの時間には、生徒の表情や動きから充実感のようなものが感じられ、全員が主体的に動き、短時間で片付けを終えることができた。

4-3　勤労観

本取り組みでは、カフェで目の前のお客様から感謝や称賛の言葉という評価を受けることで、勤労観をもてるように仕組んだ。それにより生徒は働くことのよさや楽しさを感じることができたと考える。そして、「もっと働きたい」という気持ちは、来年度以降の「働く学習」に繋げて行くことで、目の前の他者からの称賛が動機づけとなるのではなく、働くこと自体におもしろみを見出し、卒業後の働く生活へと繋がっていくことと考える。

この１年間の取り組みで、勤労観の第一歩が生徒の中に芽生えたことと考える。生徒の中には「将

来カフェで働きたい」と言う者もおり、今回の活動で得た達成感や充実感は大きかったと考える。ここで得た達成感や充実感は、次年度の学習の動機づけとなるであろう。中学部段階では働くことの楽しさを大切にしながら、今後更に、勤労観や職業観を広げていけるような取り組みを重ねていきたい。

引用文献

加藤智子・尾﨑啓子・浅田茂裕・仙石大吾（2016）特別支援教育における木工活動を中心とした生活単元学習の取り組み．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、15、55-60

加藤智子・尾﨑啓子（2017）特別支援教育における木工活動を中心とした生活単元学習の取り組みⅡ．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、16、49-56

名古屋恒彦・稲邊宣彦・田村英子・田淵健（2008）知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、７、175-182

名古屋恒彦・稲邊宣彦・田淵健・大嶋美奈子（2009）知的障害特別支援学校中学部における地域産業と連携した職業教育に関する研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、８、161-171

名古屋恒彦・名須川美智子・田淵健・田村英子・岩井雅俊（2010）知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、９、85-96

名古屋恒彦・名須川美智子・中館崇裕・熊谷佳展・岩渕昌文・今井真実・田村英子・田淵健・竹野郁子・金丸温（2011）知的障害特別支援学校中学部における地域の産業・専門家と連携した職業教育の研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、10、85-93

名古屋恒彦・田村英子・中館崇裕・熊谷佳展・岩渕昌文・今井真実・田淵健・巴真希子・中村昭彦・橋場哲（2012）知的障害特別支援学校中学部における地域と協働する職業教育の研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、11、87-97

名古屋恒彦・田村英子・中館崇裕・藤谷憲司・石川則子・岩渕昌文・巴真希子・熊谷佳展・中村昭彦・伊藤篤司・佐々木菜摘（2013）知的障害特別支援学校中学部における地域と連携した持続可能な職業教育の研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、12、281-244

名古屋恒彦・藤谷憲司・小山芳克・田村英子・田村典子・小山芳克・岩渕昌文・熊谷佳展・中村昭彦・大谷幸恵・北條真聖・細田聡志（2014a）知的障害特別支援学校中学部における多様な生徒の主体性を育む職業教育の研究．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、13、235-289

名古屋恒彦・藤谷憲司・小山芳克・田村英子・田村典子・阿部豪・熊谷佳展・中村昭彦・大谷幸恵・細田聡志（2014b）知的障害特別支援学校中学部における目標・手立て・評価に着目した職業教育の研究．岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集、１、80-85

文部科学省（2017）特別支援学校学習指導要領解説　総則等編（幼稚部・小学部・中学部）

（2017年10月30日提出）

（2017年11月18日受理）

A practical study to support independence on the life unit at lower secondary departments of school for special needs education

Tomoko KATO
Special Needs school affiliated with Saitama University
Keiko OZAKI
Integrated Center for Clinical and Educational Practice

Abstract

This is a practical report on 'life-unit learning' in a junior high school course of school for special needs education. The theme for one year is "Let's open our café shop". The students worked on the vegetable cultivation for ingredients of menu dishes, the production of furniture and tableware, cooking, and service with hospitality. The aims of this activity are to develop how to interact with other people and to foster the recognition of work. Various improvements have been made in an effort of roll assignment and how to support depending on the students' individual condition and issues.